

| | |
|------------------|---|
| Title | 西垣恒矩著 米穀経済論 |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 三田学会 |
| Publication year | 1913 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.4 (1913. 10) ,p.823(201)- |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 批評と紹介 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19131022-0201 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

關二著 工業政策 下卷

大正三年六月寶文館發行
菊版九五九頁定價金參圓參拾錢

我國に於ける憲政の發達は頗る遅々として、婦人參政權問題は愚が成年男子の一般投票權すらも未だ重大なる政治問題と爲らざるが如き有様なり。否な明治二十二年に發布せられたる所謂憲法なるものすら昨春官僚黨に依りて蹂躪せらるゝの危険に瀕したり。而して我國の官僚黨は陸海軍を其中堅と爲すものなれば、日本は未だ武力と金力との争闘時代を脱せざるものと謂ふ可く、従つて金力が武力に打勝ちたる後に於て起る可き金力と勢力との争闘は未だ開始せられざるなり。

然りと雖も、前期議會開會中に於ける政權争奪の経路を按ずるに、武力が遂に金力に膝を屈するに至るも餘り遠き將來のことにも非ざる可しと思はる。而して資産階級が一朝政權を掌握するの嚆には此階級に對する無資産階級の運動が開始せらるゝの順序と爲る可し。此運動たるや、一面に於ては般投票權の請求として現はれ、又一面に於ては勞働組合の活動の形式を以て世人の耳目を聳動するに至るならん。而かも、我國は東に不幸なる對米問題を控へ、北に侵略の妙を得たる露に接し、西に噴

火山なる支那と唇齒の關係を有するを以て國民一致して外交問題の解決に努力す可き地位に在り。されば、自然の成行に任せなば當然將來に來る可き激烈なる資産階級對無資産階級即ち勞働者の争闘に對して豫じめ緩和の策を講じ、以て一朝其争闘の發生したるとき、兄弟牆に關して外人の侮を招くの愚を得ふことを避けざる可からず。而して此勞働争闘の緩和策を講ずる爲めには先づ其争闘の原因形式結果を研究し、且つ此種の争闘に對して歐米の先進國が既に採用し又は現に試みつゝある種々なる救済策を比較研鑽し、然る後最善の方法を參考として我國に最も適せる争闘の豫防策を講ずるを以て可とすべし。

法學博士關一氏は人の知れるが如く工業政策專攻の大家にして、一昨年『工業政策』上卷と名ぐる書物を著して廣き意義に於ける工業の發達に關する氏の研究を發表せられたるが、本年に至りて更に頭書の如く同書の下卷を上梓せられたり。此下卷の收むる所は吾人の知らんと欲する勞働問題發生の原因、並に歐米各國の採り來りたる救済策の梗概と之に對する著者の批評にして、且つ各章の初めに内外の參考書を掲げたれば、勞働問題の研究者は勿論一般愛國の士に取りて本書は有数の好參考書なりと謂つ可し。

西垣恒矩著 米穀經濟論

大正二年二月東京丸山舎發行
大判二百三十八頁定價金壹圓

清水吉松氏著米穀投機論は主として米穀の賣買方法を論ずるに反し、本書は米穀の生産方法及び米價とを詳説せんと試みた。全書を五章に分ち、第一章本邦經濟界に占むる米の位置、第二章米の需要供給、第三章米作の三要素（土地、勞力、資本）並收支、第四章米價論、第五章米販賣組織の改善とす。第二章に於ては世界各國に於ける米の生産及消費額を擧げ、終りに我國に於ける將來の需給に論及せり。第四章米價論に於ては米價が歴々貨幣價值の下落の爲めに騰貴せるの事實を指摘し、貨幣の數量と米價との關係を明かにせんと努めたり。第五章に於ては共同販賣、米券倉庫、米穀販賣組合等が農民の利益を保護するに有効なるものなる所以を論述す。

米穀經濟を論ずるに當りて種々の方面より之を試むることを得べし。一は生産の技術、二は需給の關係、三は取引、四は消費者若くは生産者の利益等なり。清水氏の著書は此中第三の立場地を選び、西垣氏の著述は第一、第二、第四に重きを置けるが如し。此兩書の中孰れか其の一のみを讀まば、何か物足りぬ心地するならんも、兩者を併せ讀まば、米穀經濟の大體に通ずるを得るならんか。

兩者は各々稍異なる方面を研究せるものなれば、之が優劣を論ずべきものならざれど、清水氏の著書は概して本書よりも資料の精選に努めたるが如し。之に反して後者は前者よりも粗雑なれども統計を載すること多し。又前者の議論は後者よりも經濟學の原理に其基礎を置く所多きものなるやに見受く。唯本書に於ては米價の騰貴と貨幣の増加との關係を明かにせんと努めたる點に於て清水氏の著書に優れるを見る。何れにしても、本書は前書と同じく問題を解決せるものに非ずして寧ろ問題の解決に必要な研究資料を提供せるものと看做すべし。斯く言へばとて吾人は決して本書の價値を疑ふ者に非ずして却つて吾人は不充充分なる資料を用いて問題を解決せんと勉むる著述よりは寧ろ本書の如き資料其物を提供する著作を歓迎する者也。